



教育留学に感謝

伊藤 和幸さん (茨城県在住 42歳・町村出身)

私は中学卒業まで五城目町で過ごしました。現在は仕事もあり、茨城県で暮らしています。そんなある日、ふと目にした五城目町の教育留学。ぜひ息身に体験させたいと思い、すぐに申し込みました。

ふるさとを離れ20年、息子は父の故郷が秋田県の五城目町と知ってはおりますが、お盆やお正月に数日滞在する程度です。確かに理解はしておりますが、親としては、もっともっと知ってもらえる機会があればと思っておりました。父が生まれ育った大地の緑、山河の奏でる音色、純白の雪景色と白い吐息、

そこに暮らす人々の気持ちや想い、自分が育った環境。そう、自分を育ててくれた、自分のアイデンティティーが詰まった、あの五城目町にもっと深く触れて欲しい、そして、その風景を目に焼き付けて欲しいと。

今回、息子は、新しい仲間と囲まれ素晴らしい体験をさせていただきました。しかし、本当の教育留学の価値は、もっともっと後に、息子が五城目町との縁を忘れずに大人になった時にきっと分かると思います。

いろいろな方が教育留学を利用されているようで、心配は無いのかもしれませんが、私のよ

うに思っている町出身の方は数多くいらっしゃるはず。ぜひ、多くの方に五城目町との縁を再び結び直す機会にできれば、きっと未来へと続く素晴らしい取り組みになると思います。このたびは本当にありがとうございました。



息子の謙さんは、「父が育った五城目一中の授業や雪国の暮らしなどを体験し、とても良い経験となった」と、教育留学を振り返りました。

ふるさとを想う

今も心に残る故郷の情景

伊藤 智 秀 (坊井地出身)



馬場目の森山「薬師山」からの日の出

なぜ祖父母に預けられたかは今でもよく分からないが、親から離れた寂しさもあり、最初は白い大きな夕馬という飼犬がいちばんの友達だった。幼馴染の同級生や、村の生

伝説二つの森山の妹「薬師山」は「馬場目の森山」といわれ、姉の「五城目の森山」の東に位置する。私は昭和27年、町の中心部から見て薬師山の裏側、馬場目川が薬師山にぶつかり90度に左折したあたりの坊井地に生まれた。父の転勤などで、五城目町にいた期間は、幼いころの数年と、4年生から6年生まで杉沢小学校に通っていた3年間である。いずれも祖父母に預けられた期間で、小学校は3校目、当時、両親と妹は増田町(現在は横手市)に住んでいた。

どこにいても、冬はともかく、夏は欠かさず五城目に帰った。今は古希を超えたが、文京区の男子学生寮の寮長として元気に働いている。数年前に母、そして父も亡くなったが、兎追ひし彼の山、小鮎釣りし彼の川を決して忘れたことはない。

活になじむにはどうすれば良いか、子供心に考えた。そつだ、地元の子どもたちには負けないくらいこの田舎のことを知ろうと。祖父母には、春は山菜のこと、秋はきのこのこと、年上の子どもたちには、馬場目川での川遊び、とりわけ「くきをねじる」ことを教わった。ウグイを石に追い込んで手づかみすることだ。6年生の時には一日で100匹も捕まえられるようになっていた。気が付いた時には、友達もたくさんできていた。

卒業を迎えて

～感謝の思いを胸に～

卒業にあたり高校生活を振り返ると、一番に思い出されるのは部活動の思い出です。私は高校の3年間バドミントン部に所属し日々の練習を頑張ってきました。2年次に新体制になると主将を務め、引退までチームを引っ張ることができました。

この3年間の部活動は実に多くの人々に支えてもらい、とても感謝しています。顧問の先生方やコーチの方々、チームメイトのみんな、そして家族。最後までバドミントンができたのは、家族のおかげです。これ

までずっと支えてくれた家族には本当に頭が上がりません。高校卒業後は、こうした感謝の気持ちを胸に自分の人生を実りあるものにするように頑張っていきたいと思えます。

私は、地元五城目町の森林資源の豊かさや林業の後継者不足などに着目し、林業に興味を持つようになり、林業技術者を養成する学校への進学が決まっています。自分を育ててくれた地元のご恩にも報いたいと思えます。

(3年 石井幸一郎)

3月の主な行事予定

1日(水) 卒業証書授与式	20日(月) 修了式
3日(金) 学年末考査(～10日(金))	27日(月) 離任式
7日(火) 学力検査実施日	28日(火) 新入生オリエンテーション

五城目高校ホームページ: <http://www.gojome-h.akita-pref.ed.jp/>



五城目高校のわだいを定期的にお届けします!



部活動紹介でのひとコマ



校舎の背後にそびえる、町のシンボル「森山」

「ごじょうめの文芸」

芸



「短歌」
歩みいでゆるき勾配ある道と
気づける足をふとも寂しむ

大川 小熊 正明

「俳句」
早朝の息子の声は「雪どうだい」
心配ありがと床のなかり

西磯ノ目 小玉 明子

雪国の宿命なれど過酷なり
春待つ今朝の雪原眩し

岡本 大石 政子

「俳句」
手作りの温もり届くきやのこ汁

八郎瀧町 北嶋美保子

庭の隅土押し上げて落のとう

昭辰町 本間 富子

「川柳」
正念場その時きたら出る答え

高崎 館岡 絢

しみじみと古希の切符の有り難さ

長町 平川のぶ子

人は人 分かつていてもある邪心

西野 佐藤ちずる

相応の幸せで良い三世代

大川 渡部 光人

紀久栄町 柴田 銀河